

何故にロータリーなのか

人は皆、まず自らの幸せな生き方を求めることができる。このことは、いうまでもなく近代思潮の原点であろう。ところが、同時に、人は、周囲の人々の幸せなくしては、自らの幸せを手に入れることはできない。このことも、現代の大多数の人々がすでに確信を以て理解しているところである。人の世の幸せには、人の心が深くかかわっているからであろう。従つて、人は、自らが幸せになるに伴つて、周囲の人々を幸せにするように努めなければならず、また、周囲の人が幸せになるに伴つて、自らもさらに幸せになつて行くことができるのであろう。

このようにして、人は、自らの幸せを手に入れるためにも、自らの周囲の人々に色々な働きかけをして行くことになるのであろう。その周囲の人々の範囲も、家族や地域社会から始まつて、一国の国内社会から国際社会へと拡がって行くの

であらう。

ところで、このような考え方は、人間とその生き方にかかわる普遍的な考え方であつて、何もロータリーだけに独特のものではない。しかし、ロータリーの特色は、このような考え方に対応するにあたり、極めて適切かつ効果的な組織と独自の奉仕活動の手法を採用しているところにあるのではないかと思われる。私どもが、ロータリーに入会して、ロータリアンとして活動することに生甲斐を感じる所以である。

(一九九〇年七月)

ロータリアンに期待される現在の課題

——クラブ公式訪問における挨拶から——

私は、日本のロータリアンが現在ほど本格的なロータリー活動をしつかりと実行して行くこと、換言すればロータリー活動の真の意味における一層の活性化をはかるように努力することを求められている時期はないと思う。そして、そのことを明らかにするため、とりあえず次の三点について、具体的な問題の指摘を試みたい。

一、まず、第一点は、私どもはロータリーを真の意味で理解しているであろうかという問いかけである。換言するならば、私ども会員の一人一人が、ロータリーへの真の理解をさらに深めるべきではなからうかとの提言である。

私どもは、ロータリーのことを一応知っているように思っている。しかし、果たして大丈夫であろうか。知識としてのロータリーを詳しく知っていても、それが直ちに真にロータリーを理解していることにはならない。何故ならば、ロータリーは、人がこの社会に生きて行くための基本的な考え方や取り組み方の問題であり、換言するならば、社会に関する意識や思想の問題ではないかと思われるからである。

ご承知のように、ロータリーは、我が日本ではなくアメリカで生まれた。アメリカは、アメリカの人達が自分達で作った国であるという意識、すなわち当事者意識のうえに成立している国で、個人は社会に一定の利益を期待し要求することができるという権利の意識が明確である反面、人間の社会は人々の色々な需要を充たしていることが必要であるし、またそのまま放置しておけば徐々に質が低下して行くものであるから、自分達の責任で不断に社会のために職業上の便宜を始めとして色々な成果を提供して行く義務があるという責務の意識も明確であるということ、個人と社会との関係がごく自然に「サービスの理念」という考え方によって結ばれているのであろう。ところが、日本では、生まれてみたらまたま日本であつたということ、どちらかといえば社会は人間を容れる巨大な容器

であつて個人とは別に存在し、個人が押そうが引こうが大した影響もなく、個人は周囲を見渡しながらこの社会に上手に適応して生きて行くことを最善とし倫理とするという適応意識に重点があつて、社会意識の面でアメリカとは根本的に異なつており、そこには元来サービスタといつた觀念が存在していない。そこで、日本ではこの「サービス」という「理念」を、やむをえず「奉仕の理想」などとして訳しているが、受け止め方によつては全く似て非なるものを心に描いていることになりかねない。アメリカにおいては、社会意識としてはアイ・サーブはむしろ自明の理で、すぐにウイ・サーブの行動にとりかかつた方が効果的だなどという議論が成り立つのであるが、日本では、先ずしつかりとアイ・サーブの考え方の基本の理解から始めなければならないということであらう。

大正九年、敬愛する米山梅吉氏によつて、このようなアメリカの「サービスタの理念」がロータリーの衣に包まれて日本に持ち込まれたが、その後七〇有余年の時の経過は、ロータリアンを中心とする日本人の社会意識の变革に何らかの成果を与えたであらうか。否定的な見解が有力で、そこに問題の基本となる大切な視

点があるのではないであらうか。「サービスタの理念」とは何物であり、何故にそのようなことを考える必要があるのかという疑問への理解が、すべての出発点になるのではないかと思われる。そうでなければ、私どもは何のためにロータリーに入会し、サービスタ活動をしなければならないのかという原点が納得して理解できないであらうし、そのようなことでは、本格的なロータリー活動やロータリー活動の眞の活性化などは到底望めないと思うのである。ロータリーアクトやインターアクトの活動やいわゆるボランティア活動が眞の意味でなかなか日本の社会に定着しないという現実、社会の問題は自分達の手で責任を以て最終的に解決しなければならぬという当事者意識と「サービスタの理念」の底流が存在しなければ成り立たぬものであることに思いをいたすとき、この疑問への厳しい例証となるものと思われる。

二、次に、第二点は、私どもは、ロータリーのサービスタ活動の現状を具体的によく知っているであらうかという問いかけである。換言するならば、私ども一人一人がもつとロータリーのサービスタ活動の現状の認識を深めて共有するように努

めなければならぬという提言である。

私は、もともと大変不勉強なロータリアンで、ロータリー財団の国際親善奨学生、ロータリー米山記念奨学会の奨学生、研究グループ交換（GSE）、国際青少年交換、ロータリー青少年指導者養成プログラム（RYLA）など、どのような活動がどのようにして実施されているのか、また、関係のロータリアンの方々がどのようにご苦労をなさっているのかを殆ど知るところがなかった。今回過去二年余に亘り、各種地区委員会の活動を拝見させて頂き、及ばずながら勉強させて頂いた結果、サービス活動の現状をある程度具体的に認識し理解することができるようになったが、同時に、このような現実をご存知のロータリアンが意外と少ないのではないかとも感じるようになった。例えば、私は以前はロータリー財団の活動の実情を知らずにいわれるままに寄付をして、それで結構良好なロータリアンなどと自惚れていた。しかしながら、それだけでは、私の行為はいわば単なる経済的な出捐行為にすぎず、サービス活動とはいえなかつたわけである。サービス活動の実情を知らずしては、その目的や価値の認識なくしては、本格的

なサービス活動は存在しないかも知れない。それに、サービス活動の自覚なくして、果たしてサービスへの意欲が真に湧いて来るものであろうか。ロータリー活動の真の活性化の第二の条件は、ロータリアンの一人でも多くの方が、現実に行われている活動の現状と意味を、少しでも多く少しでも具体的に知って頂くことであると固く信ずるものである。

三、最後に、第三点は、ロータリーは今のままでいいのであろうかとの問いかけである。換言するならば、私ども一人一人が、社会的な諸問題の現実をよく認識し、これらに対するロータリアンのサービス活動の現在及び将来のあり方についてなお一層の検討と対応のための準備を始めるべきであるとの提言である。以前のように、静かで安定した社会にあっては、ロータリーの活動も静かで安定した活動で十分に社会の需要を充足していたであろう。しかし、現在私どもが生きている時代は大変な激動期で、人によつては二、三世紀に及ぶ変化を僅々五年か一〇年で達成してしまう時代だといわれる。このことは、その原因によつても裏付けられるであろう。

例えば、まず、私どもの生活を支える社会や経済の基盤が根本的に変わりつつある。従来の私どもの生活は、人間の自由と競争を前提とした資本主義やその弊害に対する対症療法としてのその修正的な手法と、その前提自体を否定する実験としての社会主義やその修正的手法との二極対立の構造の上に成り立っていたが、現在、当然の歴史的経過として社会主義的な手法が否定され消え去ろうとしており、そのあとは、世界的規模で地域の実情に応じ多様な市場経済の修正主義の手法が適用されて行く多極化対立の構造の世界へと変革しつつあり、この移行に伴い、私どもの生活も根本からの変化を遂げて行くと思う。

次に、底知れない科学技術の開発である。いわゆる環境問題は、これだけを単独に取り上げることとは、一面的であり対症的である。科学技術の開発と環境問題とは一枚の板の表裏であり、両者を一体のものとして観察し評価し判断をしなれば、正しい理解と処理を失する惧れがある。現在では、環境の面で地球が危ないと指摘される程度に科学技術のとめどもない開発が進められているものと考えるべきであろう。科学技術は、本来は欧米的資質の一部の拡大にすぎないと思う

が、感覚的な快適生活を追求する人間の本能に直結しているために、殆ど無倫理的に開発が進行し、むしろ止めようもない状態で、私どもはその先端情報など殆ど知らないというのが実情であろう。このような科学技術の開発が今後私どもの生活にどのような変化を与えて行くかは、想像を絶するものがある。

最後は、私どもの心の変質である。私どもは、私どもの心の環境が過度の競争体質によって余りにも多くを占められており、そのために深刻な障害を惹き起こしている事実から目を背けることはできない。私どもは、物心がつくや否や、成人までの大切な精神形成期を、人間の資質の一部にすぎない知能を病的に磨き上げる激甚な画一的競争教育の渦中に投げ込まれて過ごすことを余儀なくされる。次いで、行政であれ企業であれ専門職業であれ、強固な管理組織に支配され影響された内外のより激甚な競争体質社会の中に埋没して、一生を過ごさざるを得ない。そして、遂に殆ど自身と家庭を顧みるゆとりもなく一途に職業生活を終えてみれば、自己を持たない一握りの生身の粗大ゴミないしは産業廃棄物と化し、最も困難な高齢者対策の対象となり下ることとなるのではないかという、笑えない

話も巷間ささやかれている。個人的資質には社会的資質としての側面があるし、私どもの真の資産は健康と時間であるし、自己のない高齢者ほど悲惨なものはないし、私どもはこのようなことをよく理解しながら、なおこれらの側面に目をくれるいとまもないのである。そして、その結果、私どもの心は、私ども自身や他人や社会に対する正常な関心と価値観を失い、心の変質というかつてない深刻な問題に直面している。しかも、この問題は、性質上、当該本人は自覚できないという致命的な側面を持っているのである。

そこでロータリーは、これらの急激に迫り来る社会的諸問題の解決のために何か働いているのであろうか。私どものロータリー活動のこれらの問題への対応は、果たして十分であらうか。むしろ、何もしていないのではないか、殆ど無関係ではないかとの声も多く聞かれる。もちろん、そのような問題は専門の行政に任せとおけばよいので、素人である私どもロータリアンが一夕出て行く必要はないという有力な反論もある。しかし、行政というものは、確かに立派な成果をあげている社会的手段であり、なかなしく我が国の行政は、世界超一流の能力を有している

が、性質上どうしても縦割りの機構と予算に合わせて画一的事務的にしか問題を処理することができないし、外からの解決に終わるといふ手法上の限界もある。ところが、私どもが対面する各種の問題は、行政機構に合わせて起こるものではない。すべての問題を問題自体としていわば個性的に取り上げ、しかも心の内からの方法を用いなければ、真の解決とはならない。従って、社会的諸問題の解決は、結局は社会の構成員自身による不断の自助努力がなければ最終的な解決には至りえないという古来の真理が、今日ほど必要とされる時期はないと思われる。しかも、当事者意識が稀薄で適応意識が主流となっている日本の社会で、果たしてこのような解決の方法が可能なのかという根本的な疑問も否定できない。私どもロータリアンは、「サービスの理念」を掲げ、このような自助努力の中核的行動を担って行く者として、自らの存在の価値の自覚を新たにする必要があり、そのためには、私どもは、私どもを取り巻く広狭さまざまの社会問題の現実への認識を深めるよう努力を傾け、その対応のあり方の検討とそのための必要な準備に着手しなければならない。ロータリーの今日的存在意義と真の意味の活性化は、

この検討と準備のすみやかな着手によつてのみ、その将来を保證されると考えるものである。

世界的規模における人間社会の政治、社会、経済情勢や価値観の変動は、まことに目まぐるしいものがある。人間の顔を求めて発足した社会主義の手法も、多年に亘る歴史の実験を経て、漸くその使命を終えようとしている。しかしながら社会主義的手法の否定は、そのまま資本主義やその修正的手法その他の在来手法の肯定を意味するものではない。問題が振り出しに戻っただけである。私どもは、私どもの生甲斐と幸せを求めするために、あらためて原点に立ち戻り、個人と社会のあり方に思いをいたし、人間の自由の尊重と新たな価値観の確立と競争の正しい内的制約の構築に努めつつ、人間の顔をした社会の実現に努めて行かなければならない。その意味において、「綱領」「サービスの理念」「四つのテスト」などに集約されているロータリーの思想の存在意義が、今日ほど強調され期待される時代はないのではないかと思う。何故ならば、ロータリーこそは、現実の社会にしっかりと根を下ろしつつ根底から人の心を扱うものであり、これ以外に人間社

会を現在の破滅的状况から救う手段はありえないかも知れないからである。私どもは、思いを新たに、相ともに手を携え、私どもの社会を大切にいとおしみなながら、この社会の地の塩となり、この社会に一粒の麦を播き、真の意味におけるロータリー活動の活性化のため、本格的な努力を重ねて行かなければならないと思うのである。

(一九九一年六月)

奉仕(サービス)の理念の統一的理解

いうまでもなく、人は、個人としての日々の幸せな人生を求めて実現し享受できることは当然で、むしろそのために人は存在しているのであるが、同時に人は、自己の周囲の人々や社会の恩恵なくしては一刻も生きることができないことも真実である。否、むしろ、私どもの精神や財産の存在の殆どの部分が、社会とその恩恵によって構成されているといっても、過言ではない。人間は社会的動物であるといい、社会性をその本質とするというのも、そのような見地からである。従って、私どもは、社会からその恩恵を受け取ると同時に、自己の言動の成果を社会に提供し還元して行くという社会的な責務を負っていると考えなければならぬ。何故ならば、社会は有限であるし、その構成員の不断の努力によって良好な状態を保持しなければ、結局は構成員である私どもの生活自体が低質なものとなり、私ども自身が不幸せとなるからである。社会から自分勝手に気ままな収奪をしておいて、あとは自分以外の誰かがその後始末をして社会のお守りをしてくれるであろうと期待するなどという安易な考えは、人間としての基本の倫理を欠いた見解というべきであろう。

このように、社会は私どもによって構成されるものであること、そして私どもは社会の当事者たる立場に立つものであることを自覚するとともに、社会に対して自己の言動の良質な成果を提供して行く基本的な責務を負うことを厳しく自覚し、このような自覚の上に立って社会に向けて具体的な行動を行うことを奉仕(サービス)というべきであろう。そして、このような奉仕(サービス)は、一括して、広義の社会奉仕として、一般に理解し呼称すべきものであろう。職業奉仕は、自己の職業を通じて行う社会奉仕である。狭義のいわゆる社会奉仕は、地域社会における社会奉仕である。国際奉仕は、国際社会における社会奉仕である。もともと、国際社会における奉仕にあたっては、その前提として、言語、生活習慣、価値観、政治、経済、社会の各状況の相違などに起因する幾多の障害を克服し解決

しなければならぬために、特別の工夫と努力とが必要となるが、その本質がグローバルな地域における社会奉仕にあることに、疑いはない。青少年奉仕は、次代を担う青少年層への社会奉仕である。クラブ奉仕は、このような社会奉仕活動を行う集団を適切に構成して維持発展させるための基礎作業にかかる奉仕であろう。このようにして、ロータリーの奉仕活動は、広義においては、すべて社会奉仕たる実質を持つものと統一的に理解できるものと考える。ロータリーの金看板は職業奉仕であるという指摘は、性格論としては適確であると思うが、それ自体で本来的な社会奉仕自身であると言い換えた方が、平凡ながらより平均的に適切な表現であるかも知れないと思うのである。

ただ、ロータリーが発生したアメリカは比較的新しい国で、国民の間で、自分達の社会は自分達が作った社会で自分達が当事者であるという意識が、比較的はつきりしているのではなからうか。従って、ロータリーのいう奉仕（サービス）の観念も、むしろ当然のこととして人々にごく自然に受け入れられる素地があるのではなからうか。これに比して、我が国では、私どもが生まれてみたらまた

ま日本であっただけで、日本の社会は、個人とは別に存在し、今後も独自に存在を続けて行く大きな組織体で、私どもが多少収奪しようが貢献しようが大した影響もなく、私どもはただ社会への適応だけを考えて上手に生きて行けばいいのだといった意識が支配的なのではなからうか。従って、当事者意識が比較的稀薄であるから、日本のロータリーの活動は、まず奉仕（サービス）の観念の自覚と理解から念入りに始めなければならないのかも知れない。日米双方のロータリーで、アイ・サーブとウィ・サーブの重点の置き方に微妙な違いが見られるのも、案外このようなところに原因があるのかも知れない。

最後に、奉仕（サービス）を人の社会的責務として理解するだけでなく、進んで人間の社会性の充足としての見地から理解して、個人としての幸せを享受するために絶対に必要な条件としての価値付けを行うべきものであるとの見解があることを付言しておきたい。

（一九九一年二月）

ロータリーの手法に関する独善的見解

ロータリーが採用し実行している色々な組織や活動を見渡してみると、そこには何かしら共通したロータリーらしい手法が存在するように思われる。その幾つかを、次に摘記してみたいと思う。

まず、ロータリー活動における「強制」である。私は、ロータリーの組織と活動は、自発的要素と強制的要素とが複合して成り立っていると思う。例えば、会費の支払はもちろんのこと、例会、フォーラム、懇親会その他各種会合への出席と参加、ロータリー情報の研修、雑誌の購読、会員増強や広報の責務、各種の寄付その他各部門に亘る本格的なサービス活動の計画と実行の責務に至るまで、その確保が強制によって裏付けられているといっても、過言ではない。ただ、その強制は、ロータリアンは自他の幸せのために、また社会のために必要なことをし

ているのだという確信や、強制自体が自発的意思と共にあり、また自発的行動の契機となるものであるという確信によって裏付けられているものである。従って、その強制は、ロータリーらしい強制であることが求められるであろう。出席の競争や各種の表彰からニコニコ箱の名称などの工夫に至るまで、色々な手法がこのような見地から是認され推奨されるであろう。「ロータリーの友」をフォーラムの素材に使うという手法も、雑誌の購読を強制するという見地から、まことにロータリーらしい巧みな手法といえるであろう。ロータリー活性化のための一つの視点かと思う。

次に、ロータリー活動における「循環」である。親睦が広まり深まれば、出席がよくなるであろう。出席がよくなれば、ロータリー情報が徹底して行くであろう。ロータリー情報が徹底すれば、サービス活動が活性化するのである。サービ
ス活動が活性化すれば、親睦も広まり深まるであろう。この逆の循環も可能であり、極めて有益である。また、右以外の色々な循環も考えられる。このように、ロータリー活動は循環する。よい方に循環すれば、ロータリー活動は自然と活性

化するであろう。悪い方に循環すれば、ロータリー活動はとめどもなく低調なものになるであろう。ロータリー活性化のための一つの視点であろうかと思う。

最後に、ロータリー活動は、その仕上げの段階で、サービス活動の「受け皿へのサービス」を必然的に予定していると思われる。例えば、ロータリーのサービス活動は、物のサービスでなく、心のサービスであるといわれる。サービスを行うロータリアンと受けて頂く人々との心の交流を前提とするからであろう。心の交流は、サービスを行うロータリアンからサービスを受けて頂く人々へのロータリーへの理解の働きかけによって成立する。いわば、ロータリーのサービス活動は、受け皿である人々のロータリーへの理解によって完成するものであり、サービスを行うロータリアンは、その受け皿である人々にロータリーへの理解を提供すべきサービスを行う責務を負っている。広報がロータリアンの個人的基本責務だとされる所以の一つであろうと考える。また、青少年の世代は、私どもロータリアンのロータリー活動全体の継承世代である。従って、ロータリーの青少年へのサービス活動は、ロータリーの受け皿へのサービス活動の最も包括的で重

要な意義を持つものというべきである。このように、ロータリーがサービス活動の受け皿に至るまでサービスを予定しその徹底に努めているということは、ロータリー活性化のための一つの視点であろうかと思うのである。

(一九九一年七月)

アイ・サーブかウイ・サーブか

社会の中においてのみ生きて行くことができる私どもは、社会を構成する当事者として、社会が提供する利益を享受できる反面、職業を通じまた一般の社会的活動を通じて自己の言動の良質な成果を社会に提供して行く基本的な責務を負うことを自覚し、このような自覚の上に立つて、この責務を社会に向けて果たすための具体的な行動を行うことをサーブというべきであろう。アイ・サーブとはロータリアンが個人としてサーブを行うことを意味し、ウイ・サーブとはロータリーがクラブや地区や或いはR I（国際ロータリー）などのロータリアンの集団としてサーブを行うことを意味することは、いうまでもない。ところで、アイ・サーブかウイ・サーブかは、ロータリーの世界、なかならず我が国のロータリーにおいては、古くて新しい論題である。近時における職業分類の軽視とか量

のみに傾いた会員増強や拡大などの傾向に加え、先般R Iが職業奉仕における新方針を定めたことや、社会奉仕活動における方針を定めた決議二一―三四を廃止しようとする動きがR Iにおいて最近に至るまで根強く継続したことや、三HPプログラムとかポリオ・プラスなどの巨額の資金調達を前提としたR I主導の広域的で継続的な大規模サーブ活動の企画と展開が相次ぐ現況にあることなどの当否をめぐって、ますますその論議がより厳しい形で行われつつあるものようである。

ところが、アイ・サーブかウイ・サーブかは、色々な段階で取り上げることができる論題であって、どの段階における問題として論議しているかの立場を明らかにしておかなければ、論議が噛み合わないこととなるのではなからうか。例えば、私どもの内心における価値観とか行動基準がどうあるべきかを考える理念の段階において論議するのであれば、私ども一人一人がサーブの精神を自覚してその自覚の上に立つて行動すべきであるということであって、論議は性質上アイ・サーブに尽き、ウイ・サーブを論ずる余地は殆どないであろう。しかしなが

ら、さらに進んで、サービスを実行するにはどのような手法によるべきであるかを考える段階において論議するのであれば、一人一人が個人として実行すればよいとか或いはそうすべきであるというアイ・サーブの考え方と、クラブとか地区とかRIといったロータリアンの集団として実行すればよいとか或いはそうすべきであるというウィ・サーブの考え方とが出て来て、いずれを原則とすべきか、いずれが正しいかという論議に発展して来るのではないであろうか。そして、アイ・サーブの手法によれば、サービスの行動に伴い、個々のロータリアンのサービスの理念への自覚も深まり、また極めて良質のサービスが期待できる反面、個々の個人的サービス活動だけではその成果の社会的な拡がりや効果が必ずしも十分には期待できないかも知れない。ウィ・サーブの手法によれば、十分な社会的拡がりを持つて効果的なサービス活動が遂行され、社会的にも技術的にもまた意識の面からも世界的規模で激動し激変する国際社会に生起する新しい時代の幾多の諸問題にロータリーとして適確に対応して行くことが期待できる反面、ロータリアン個人としてのサービス活動への意欲を低下させ、ひいてはサービスの理

念への自覚や理解への機会を減少させるだけでなく、サービス活動自体も画一的で量的な成果のみを求めて心を伴わないものとなる事態が起こることが予想されないわけでもないかも知れない。

結局において、私どもは、理念の面では、アイ・サーブの精神を堅持しつつ、実行の面では、アイ・サーブの手法とウィ・サーブの手法のいずれか一方に偏することなく、それぞれの手法の陥り易い欠陥に深く配慮しながら、それぞれの手法の持つ長所を生かし、問題の個性と特質に適合するよう二つの手法の適切な配分に努めて行くべきではないかと考える次第である。

ちなみに付言するならば、欧米社会のように、サービスの理念が当然の社会意識として比較的定着している社会では、理念の面でのアイ・サーブの考え方をさほど強調する必要が少なく、いきなり実行の面でのアイ・サーブとウィ・サーブの各手法に入って行けばよいのかも知れない。しかしながら、我が国などのように、サービスの理念が必ずしも社会意識として十分には成熟していない社会では、まず理念の面でのアイ・サーブの考え方から注意深く大切に育てて行かなければ

ならず、その辺にアイ・サーブかウイ・サーブかの論議の存在意義があるのかも
知れないと思うのである。

(一九九二年四月)

